



Spinal Cord Injuries

comprehensive management and research

by Sir Ludwig Guttmann

Stoke Mandeville National Spinal Injuries Centre は 1944 年戦傷による脊髄損傷患者の初期から一貫したリハビリテーションを行う病院の一つとして設立され、その発展の歴史は脊損リハビリテーションの歴史といえる。このような重度障害者の病院を単なる収容施設に終らせないためには、いくつかの条件が満たされなければならない。中でも最重要なものは、自身の専門医としての分担の一部を犠牲にしても、治療を organize し、病院を supervise する経験豊富な医師の存在であることを強調している。著者は神経生理学者および神経外科医としての長年にわたる経験をもとに、センター設立当初から参加し、director としての役割をも果たし、脊損リハビリテーションを確立した。

本書は著者の 22 年間にわたる 4,000 例以上の対麻痺および四肢麻痺治療における経験と研究に、他の著明な文献資料との比較検討を加えて書かれている。障害原因としては、外傷性を主に脊髄炎、血管障害、二分脊椎な

ども含み、解剖学的、神経病理学的な基礎事項に触れ、臨床面では初期治療からリハビリテーション治療まで詳細に述べられている。運動機能はもとより、自律神経系の異常、尿路障害、腸機能、性機能、心理問題など、およそ脊損のリハビリテーションに関する問題が網羅され、さらに作業とスポーツを通しての社会性再獲得の意義を述べている。これら多岐にわたる問題解決には teamwork が必要であり、それを成功に導く秘訣は、各チームメンバーが自己の仕事に誇りをもち、同時に他のメンバーの役割を尊重し、最終責任者としての coordinator がいることをあげている。

脊髄損傷に関する書物には今日までこれほど充実したものはない。本書は脊損リハビリテーションに携わるものにとって欠くべからざる指導書となるであろう。

(Blackwell Scientific Publications, London, 1973)

(星ヶ丘厚生年金病院、医師 博田 節夫)

Foundations of Behavioral Research

Educational and Psychological Inquiry

by Fred N. Kerlinger

大学院生に半年又は 1 年間の講義用テキストとして用いられていて、教育学、社会学、心理学に亘る研究に着手するための初歩的な本である。

ともすれば「科学」は冷たくてとっつきが悪いと敬遠しがちな学生に常識から入り込んでいる点が、抵抗を少なくしている。

章を追って、科学と科学的なものの見方、問題点と仮説、定義づけ。母集団からの標本抽出、相関関係、確率統計の目的と方法、分析方法、研究の構成と意義、充実した研究法、調査や実験、測定的基础、面接法、客観的テスト、行動観察、投射法、データーの処理、ソシオメトリー、分析と考察、研究論文の見本、が書かれている。仲々研究法の適当な本は日本語でも見つけにくい、

英語で親しむことで英文の文献が読みやすくなる利点がある。

特にこの著書には、各章ごとに説明つきでの文献紹介があり、フォローアップ研究や今後の参考のために役立たせることができる。

研究に興味を抱くように、この本を利用する内に何となく研究的態度が生れてくるような親切的書き方をしているのが分かる。学生側だけでなく教師にとっても「研究法の教え方」の参考書として活用しうる本である。

(Holt, Rinehart and Winston, Inc. New York, Chicago, San Francisco, Toronto, London, 1964)

(東京都立府中リハビリテーション学院、作業療法士 鈴木 明子)